

〔論 文〕

「ミルザ」におけるアフリカのプランテーション

——スタール夫人による黒人主人公の造形——

田 戸 カンナ

はじめに

スタール夫人(一七六六—一八一七)は今日、『デルフィーヌ』や『コリーヌ』、『文学論』や『ドイツ論』の作者として知られているが、黒人奴隷制を背景に黒人を主人公にした中編小説も残している。それが「ミルザ」である。「ミルザ」は『断片集』に収められ一七九五年五月に世に出た。作者が二九歳の時である。一七九五年は、前年にスイスで刊行された『ピット氏とフランス人にあてた平和についての省察』がパリで出版された年でもあるが、『デルフィーヌ』、『コリーヌ』、『文学論』、『ドイツ論』という大作が発表される以前の時期であり、スタール夫人の作家としての経歴の上では前期に相当する。「ミルザ」はスタール夫人の作品のなかでも大作の陰に隠れほとんど注目されない上に、注目するに値しないとさえ考えられてきた。デービッド・グラス・ラーグは「ミルザ」に関して、「ほとんど、スタール夫人は書き方を学んでいる最中であるようだ¹」と述べているほどである。そのため「ミルザ」に関する研究論文は数少なく、スタール夫人が黒人や黒人奴隷制の観点から研究されることはあまりない。「ミルザ」の作品世界においてはセネガルにプランテーションが設けら

れている。主人公の黒人男性キシメオはそのプランテーションのリーダーである。「ミルザ」においてアフリカにプランテーションが設けられていることは注目されてしかるべきである。というのも、当時、黒人が働くプランテーションが設けられていたのは南北アメリカ大陸と西インド諸島及びインド洋上の植民地だからである。このような状況にあってイギリスは既に一七六三年にセネガルにプランテーションを設置することを計画した。黒人奴隷をサンルイに連れて行き解放し、そこで綿花、タバコそしてコーヒーを栽培させるといふものである。しかし、この計画は失敗に帰した。なぜならば、西インド諸島のプランテーション経営者と、黒人奴隷を売って利益を得ていたアフリカの大西洋沿岸の国々が猛烈に反対したからであった。このイギリスの失敗例に照らしても、「ミルザ」の世界でアフリカにプランテーションが設けられていることは看過できない。本稿では、スタール夫人が黒人奴隷貿易並びに黒人奴隷制に対してどのような立場に立っていたのかを明らかにした上で、「ミルザ」の世界でアフリカに設けられたプランテーションがいかなる場として設定されているのかを考察する。これによって、スタール夫人が黒人をどのような存在として造形したのかを判明するであろう。

スタール夫人と黒人奴隷貿易並びに黒人奴隷制

(1) 周囲の人々

スタール夫人は黒人奴隷貿易と黒人奴隷制に対してどのような立場をとっていたのだろうか。この点を考える際にまず考慮しなければならないのは、夫人の身近な人たちの存在である。スタール夫人の周囲には黒人奴隷貿易や黒人奴隷制を批判する人が数多くいた。

最初に言及しなければならないのはスタール夫人が敬愛していた父親、すなわち財務総監また銀行家として知られるジャック・ネッケル（一七三二～一八〇四）である。周知のように、彼は財務総監であった一七八一年に『国王への財政報告』を刊行して国家の財政事情を公にし、一大センセーションを巻き起こした人物である。たしかに、ネッケルは財務総監に就任する以前、三〇歳の時にテリュソンとともに「テリュソン、ネッケル銀行」の共同支配人となり、この銀行は東インド会社の株を所有していた。七年戦争によって経営難に陥っていた東インド会社は最終的には倒産するのであるが、それでもネッケルはこの会社の補助管財人となり、会社の危機的状況を改善した。東インド会社は一七四四年以降、奴隷貿易をほとんど止めていたが、ネッケルが関わっていた間は東インド会社の利益は奴隷貿易からも来ていた。つまり、ネッケルは黒人奴隷貿易から富を得ていたわけである。

このような経歴をもつネッケルではあるが、彼が人道主義者であった点を見落としてはならない。彼は一七七七年に財務総監に任命されたあと、病院や貧民収容所、牢獄の環境を改善することに積極的に取り組んだ。当時、病院では病人は性別、年齢に関係なく狭い部屋に閉じ込められており、

死体が何時間も放置されることもあった。監獄では囚人は罪の内容や重さに関係なく同じ監房に閉じ込められており、獄吏に不当に扱われていた。

監房は狭く、空気も悪かった。病院と監獄の衛生状態は劣悪であった。このようななかネッケルは一七七七年に病院委員会を設置し、パリ市立病院で患者を病名別、男女別に分け、ベッド数を増やすようにし、監獄の運営組織について具体的な改革案を準備した。当時のフランスには物乞いが数多くおり、貧民収容所が設けられていたのであるが、ネッケルはモデルとなる貧民収容所をつくることを考えもした。

ネッケルの人道主義は黒人奴隷に対しても向けられた。彼は一七八四年に出版した『フランス財政論』の第十三章「フランスの植民地の税と人口」においてそれぞれの植民地の人口構成と租税を示した上で、ヨーロッパ人たちが人間の偉大さを誇りとする一方で、黒人たちを奴隷にしているという矛盾を暴き、次のように述べている。「しかしながら、あらゆる国がみな一致して黒人貿易をあきらめるといふ全般的協定の計画は夢のような計画であろうか。²」ネッケルはさらに、自らが提議して一七八九年五月五日にヴェルサイユに召集された三部会の開始にあたって行った演説のなかで、フランスは奴隷貿易を止めて奴隷制度を今よりも残酷でないものにするべきであると主張した。ネッケルは黒人を白人と同じような人間とみなし、黒人に同情を寄せていた。彼は『フランス財政論』で黒人たちを「我々に似た人間」と呼び、一七八九年五月五日の演説では黒人たちを「あの不幸な人々」³、「思考、そしてとりわけ苦しむという悲しい能力によって我々に似たあの人間たち」と呼んでいる。

スタール夫人の父親に次いで言及しなければならないのは彼女の母親である。『離婚論』（一七九四年）などを発表した文筆家でもあり教養あふれ

たネッケル夫人（一七三七～一七九四）は一七六四年九月に二七歳でジャック・ネッケルと結婚したあと、まずはパリのマレ地区にあるミシュールコート通りのブリニュー館で、次いで移り住んだクレリー通りのル・ブラン館——このル・ブラン館でスタール夫人は生まれたのであった——でサロンを主宰した。彼女は一七七〇年晩春と夏にはパリ北郊にあるサン・トウワン城にもサロンを開き、一七七五年から一七七六年にかけての冬にはショセダンタンの館に人々を迎え入れていた。ネッケル夫人のサロンは当時、パリ有数のサロンであり、デュ・デファン夫人、レスピナス嬢、ジョフラン夫人、ドゥドト伯爵夫人に加えて、デイドロ、ビュフォン、アベ・レーナル（一七二三～一七九六）、グリム、ベルナルダン・ド・サン・ピエール、マルモンテル、ダランベール、エルヴェシウス、詩人トマ、モルレ神父、アルノー神父、シュアール、マブリ、ラ・アルプ、サン・ランベール（一七二六～一八〇三）ら当代きっての知識人が続々と来訪した。ネッケル夫人はさまざまな国籍のさまざまな主義主張をもつ人々を受け入れ、宗教蔑視を除いて多様な考えを表明することを許していた。ベルナルダン・ド・サン・ピエールがこのサロンでビュフォン、トマ、ガリアーニ神父らを前に『ポールとヴィルジニー』を初めて朗読すると聴衆は退屈し、朗読後にベルナルダンは危うく原稿を火にくべるところであったというのは有名なエピソードである。

ネッケル夫人の客人のなかでもデイドロ、アベ・レーナル、ベルナルダン・ド・サン・ピエール、エルヴェシウス、サン・ランベールは黒人奴隷貿易や黒人奴隷制に批判的な立場をとっていた人物たちである。アベ・レーナルの黒人奴隷制を批判する書『両インドにおけるヨーロッパ人の植民及び商業の哲学的・政治的歴史』、通称『両インド史』は一七七二年に配

給されると大成功を収め、一七七四年、一七八一年に改訂を重ねて出版されベストセラーとなった。『両インド史』のなかにはデイドロが執筆した、黒人奴隷制を批判したくだりがある。ベルナルダン・ド・サン・ピエールも一七七三年に『フランス島への旅』を上梓し、そのなかで黒人奴隷制の実態を非難した。エルヴェシウスは『精神論』（一七五八年刊）のなかで黒人奴隷貿易と黒人奴隷制に異議を唱え、サン・ランベールは反黒人奴隷制の考えを「ズイメオ」『四季』（一七六九年刊）所収などで展開し、黒人奴隷貿易と黒人奴隷制の廃止を目指す「黒人の友協会」の会員となった。彼らがネッケル夫人のサロンで黒人奴隷貿易や黒人奴隷制を話題にし、それを批判したとしても一向に不思議ではない。ジョン・クレイボーン・イザベルは、ネッケル夫人は「黒人の友協会」に加わったと断言してさいる⁴。もしイザベルの言うとおりであるならば、ネッケル夫人もサロンの客人たちに交じって反黒人奴隷貿易や反黒人奴隷制の話を積極的に展開した可能性が大いにある。重要なのは、幼い頃のスタール夫人が母親が主宰するサロンに出席し、聡明さを発揮してそうそうたる客人たちと会話を交わっていたことである。スタール夫人は幼い頃に母親のサロンで黒人奴隷貿易や黒人奴隷制に対する批判を耳にし、それについて話をした可能性がある。

ネッケル夫妻に関しては、二人ともプロテスタントの生まれであり、イギリスに滞在した経験があり、トマス・クラークソン（二七六〇～一八四六）と知り合いであったことを付け加えておく。クラークソンは一七八七年にロンドンで設立された奴隷貿易廃止協会の設立者の一人であり、港を回って奴隷貿易について調査もし、一八二三年には「反奴隷制協会」の副会長となる、イギリスの重要な黒人奴隷貿易・奴隷制廃止論者である。

スタール夫人と黒人奴隷貿易や黒人奴隷制を批判する人との接触は成人後も続いた。彼女は一七八六年にパリ駐在のスウェーデン大使、スタール男爵と結婚したあと、パリの邸宅でサロンを開いた。幼い頃から母親ネットワーク夫人のサロンで時を過ごしていたスタール夫人は会話に長け、客人たちを魅了し、サロンの女主人として立派に振る舞った。スタール夫人のサロンにはラ・ファイエット、マチュール・ド・モンモランシー、コンドルセ、シエイエス、コンスタン、レカミエ夫人、フランス領ギアナの総督だったピエール・ヴィクトル・マルーエ（一七四〇〜一八一四）、テオドール・ド・ラメットとアレクサンドル・ド・ラメット（一七六〇〜一八二九）の兄弟、バルナーヴ（一七六一〜一七九三）、ブリソら歴史に名を残す人々が次から次へ姿を見せた。たしかに、バルナーヴとマルーエは植民地における自分たちの利益を死守しようとするプランテーション経営者らの集団「マシアク・クラブ」のメンバーであった。しかし、スタール夫人のサロンの客人のなかには、黒人奴隷貿易批判や黒人奴隷制批判の先頭に立つ人物が複数いた。まずブリソは一七八八年に「黒人の友協会」を設立した人物であるし、ラ・ファイエットとシエイエスはこの協会の設立当初からのメンバーであった。コンドルセは黒人奴隷貿易や黒人奴隷制を批判する書き物をいくつも発表した⁵が、一七八一年に『黒人奴隷制に関する考察』を、一七八八年にこの書の第二版を刊行し、大きな反響を呼び起こしていた。さらにコンドルセは「黒人の友協会」が設立されると間もなく入会し、既に一七八九年にはこの協会の会長となっていた。アレクサンドル・ド・ラメットについては、彼は「マシアク・クラブ」が設立されてしばらくするとこのクラブに接近し態度を翻してしまうが、そもそも「黒人の友協会」の会員であった⁵。スタール夫人はフランスにおける黒人奴隷貿易批判

や黒人奴隷制批判の動きの最前線にいる複数の人物と直接交流していたわけである。

彼女は二八歳の時、一七九四年九月にコペからローザンヌへ向かう途中のニヨンで一歳年下のバンジャマン・コンスタンと知り合い、二人はその後愛人関係となるのであるが、コンスタンもスタール夫人のサロンの客人のなかでないがしろにできない人物である。というのも、彼はスタール夫人の死後ではあるが、黒人奴隷貿易廃止を実現するために精力的に活動するからである。コンスタンは一八二〇年代に政治家として議会で黒人奴隷貿易の廃止を求める一方、作家としても黒人奴隷貿易の実態を暴き出し廃止を訴えた⁶。

周知のように、スタール夫人はナポレオンによって一八〇三年にパリから四〇里離れるよう命じられ、次いでフランス入国を禁止されると、レマン湖のほとりに建つ、ネッケルが一七八四年に購入したコペの館に選りすぐりの人々を集め、「コペ・グループ」を形成した。コペ・グループのメンバーにはスタール夫人とコンスタンの他、シュレーゲル兄弟、経済学者シスモンディ（一七七三〜一八四二）、スイスの文学者シャルル・ヴィクトル・ド・ボンステタン、歴史家プロスペル・ド・バラント、小説『ヴァレリー』の作者で神秘思想家のクリュードネル夫人、シャトوبرリアン、バイロンらが数えられる。このなかのシスモンディも黒人奴隷貿易廃止を唱える人物であった。彼は一八一四年九月に『黒人貿易に関わるフランスの利益について』を出版し、この小冊子は同年十一月に「黒人貿易に関する新たな考察」を付け加えられて再び世に出たのだった。シスモンディはこれ以降死去するまで、黒人奴隷制を終結させるのに最適な方法とはいかなるものかを研究し続けた。一八三三年の小冊子『解放されたニグロを置

くのふさわしい状態について——このテキストは『経済学月刊誌』に掲載された——のなかでは、近い将来、確実にフランスの植民地の黒人奴隷は自由を獲得すると考えられるが、それにあたって自由を与える側のフランス人はどのようにするべきなのかを考察している。

ナポレオンが一八一四年四月に退位し、ルイ十八世が同年五月三日にパリに入ると、フランスから追放されていたスタール夫人は同年五月十二日にパリに戻ることがかない、再びサロンを開いた。このサロンはロシア皇帝アレクサンドル一世やフランスの政治家タレーラン、イギリスの軍人かつ政治家ウェリントンの他、数多くの著名な政治家、作家を集め隆盛を誇った。このサロンの客人のなかで注目すべきはタレーラン、ウェリントン、そしてプロイセンの政治家にして言語学者ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの弟で科学的探検家かつ博物学者のアレクサンダー・フォン・フンボルト（一七六九〜一八五九）である。タレーランとウェリントンはウィーン会議の折、一八一五年二月八日にイギリス、ロシア、スペイン、ポルトガル、フランスなどヨーロッパ諸国が行った奴隷貿易廃止宣言にそれぞれ自国を代表して署名した人物である。アレクサンダー・フォン・フンボルトは一七九九年から一八〇四年まで五年にわたって、フランスの植物学者であり医者でもあったエメ・ボンブラン（一七七三〜一八五八）とともに中南米を旅して科学的調査を行っており、その際にベネズエラの町クマナで奴隷市場の光景を目の当たりにし、またキューバなどで黒人奴隷がプランテーションで働かされるさまを見て、改めて黒人奴隷制に反対していた。彼は一八一四年から一八三一年にかけてフランス語で刊行した『新大陸赤道地方紀行』の第十部第二章「キューバ島に関する政治的試論」のなかでアメリカ探検に出発する以前から奴隷制を嫌悪していたことを明かした上

で、奴隷制を次のように糾弾している。「故国で家族から引き離されて奴隷船の船倉に投げ込まれる奴隷を考えるにせよ、奴隷はアンティル諸島の地に押し込められた邪悪な人間の群れに属すると考えるにせよ、奴隷制は人類を苦しめたありとあらゆる悪のなかでおそらく最大のものである。」⁷

そして「奴隷階級の真の改善は人間のあらゆる精神的身体的状況に及ばなければならぬ」と述べ、法の整備など、奴隷制を廃止するには何をしなければならぬのか、何が必要なのかを具体的に示している。この第十部第二章は一八二六年に独立して『キューバ島に関する政治的試論』のタイトルで刊行され、翌年にはスペイン語版も世に出て、反黒人奴隷制の主張のゆえに社会的に大きな波紋を呼んだのであった。また、フンボルトはイギリスの有名な黒人奴隷制廃止論者であるウィリアム・ウィルバーフォース（一七五九〜一八三三）から尊敬を受けており、フランスで反奴隷制の委員会を設けるのを手助けしてほしいとウィルバーフォースから一八一四年に書簡で依頼されたほどの人物であった。『ドイツ論』のなかでフンボルトを肯定的に評価し、さらに『フランス革命についての考察』のなかでフンボルトに言及してもいるスタール夫人は、学術目的と兄ヴィルヘルム訪問の目的でイタリアに赴いていたフンボルトと一八〇五年にローマで会っており、⁸ ロンドンを発ちパリに戻った一八一四年五月十二日の数日後にはフンボルトを迎えている。二人の親交はこれ以降、スタール夫人が亡くなるまでずっと続いた。フンボルトは中南米の科学的探検という偉業を成し遂げた著名人であり、一八〇四年八月二十七日から一八二七年までの大半をパリで過ごし、⁹ 毎晩あちこちのサロンに顔を出しては科学からうわさ話に至るまでさまざまな話題について話をしてきたからには、彼がスタール夫人に、中南米での黒人奴隷の様子や黒人奴隷制に反対の心情を語ったと

しても何ら不自然ではない。

スタール夫人と黒人奴隷貿易や黒人奴隷制を批判する人々との接触について忘れてはならないのは、イギリスの友人たちである。一七七六年と一七九三年に、それから一八一三年から一八一四年にかけてイギリスに滞在した経験があり、イギリス文学、とりわけシェイクスピアを称賛していたスタール夫人には黒人奴隷貿易や黒人奴隷制に反対を唱えるイギリスの友人が複数いた。まず挙げなければならないのはウィリアム・ウィルバーフォースである。ケンブリッジ大学でウィリアム・ピット¹⁰の友人でもあったウィルバーフォースは一七八〇年から一八二五年まで長期にわたり下院議員を務めた政治家であり、身体が弱いながらも一七八七年から宗教的理由かつ人道的理由によって反黒人奴隷貿易、反黒人奴隷制度の活動を死去するまで推し進めた人である。一七九一年に、先に言及した奴隷貿易廃止協会の正式なメンバーとなる彼は一七九一年、一七九二年、一八〇四年、一八〇五年というように回を重ねて議会に奴隷貿易廃止法案を提出し、これらの法案はいずれも最終的に成立しなかったが、それでもあきらめずに活動を続け、一八〇七年一月三十一日には黒人奴隷貿易の実態を暴き出し廃止を訴える『奴隷貿易廃止に関する書簡』を出版するなど、一八〇七年に議会で奴隷貿易廃止が決議されるのに大いに貢献した。彼は一八〇七年以降も活動を続け、奴隷貿易廃止法が遵守されているかを監視すること、外国でも黒人奴隷貿易廃止を実現させることなどを目指した「アフリカ協会」(一八〇七年四月十四日結成)の設立に加わった上、一八二三年一月三十一日にロンドンで結成された「イギリス領全土における奴隷制の緩和と漸進的廃止のための協会」(通称「反奴隷制協会」)の副会長も務めた¹¹。そして黒人奴隷の全面的解放を成し遂げるべく書物を通じてまた演説を通じて

訴え続けた。これは彼の死から一箇月後の一八三三年八月二十九日に奴隷制廃止法の成立として結実した。

スタール夫人はウィルバーフォースと一八一三年にロンドンで会い、面識があった。ウィルバーフォースは当初スタール夫人が黒人奴隷制廃止について真剣に考えているのか疑っていたのだが、ついには夫人が真剣であることを認めた。そして彼はフランスで黒人奴隷貿易と黒人奴隷制の廃止を実現するためにスタール夫人を頼り、スタール夫人はウィルバーフォースの著作に対して「序文」を書いた。スタール夫人とウィルバーフォースは文通もしており、二人は手紙で黒人奴隷制廃止も話題にしていた。

先にネットケル夫妻がトマス・クラークソンと知り合いであったと述べたが、スタール夫人もまたクラークソンと知り合いであり、夫人はクラークソンを称賛していた。スタール夫人の息子オーギュスト・ド・スタールが一八二七年に亡くなったあとにブロイ城に運び込まれた、ネットケル家とスタール夫人の蔵書のなかにはクラークソンの著作『アフリカ人奴隷貿易不得策論』(ロンドン、J・フィリップス書店、一七八八年)、『人間とりわけアフリカ人の奴隷制と交易に関する論』(ロンドン、J・フィリップス書店、一七八五年)、『奴隷貿易に関する書簡』(ロンドン、フィリップス書店、一七九一年)、『英国議会によるアフリカ人奴隷貿易廃止のはじまりと進展と達成の歴史』(ロンドン、ロングマン書店、一八〇八年)があったことが明らかに¹²なっている。この四作品のうちはじめの二作品は一つにまとめて製本されていたという。二番目に記した『人間とりわけアフリカ人の奴隷制と交易に関する論』は元々「同意なしに奴隷にすることは合法か？」を主題とする一七八五年のケンブリッジ大学のラテン語論文賞にクラークソンが応募し、一等賞を射止めた論文の英訳である。この論文はクエーカー教徒た

ちに支援され、英訳されてクエーカー教徒の書籍商ジェームズ・フィリップスによって一七八六年に出版されたのだった。ジェームズ・フィリップスは一七八七年にロンドンで設立された奴隷貿易廃止協会の創設メンバーの一人であり、この協会による文書の出版も担当していた。

スタール夫人のイギリスの友人としてもう一人忘れてはならないのはジェームズ・マッキントッシュ（一七六五～一八三三）である。彼はスタール夫人より一歳年上の、スコットランド出身の政治家にして弁護士、歴史家、裁判官かつ植民地の行政担当者であったが、黒人奴隷制廃止のために活動し、スタール夫人の死後には「反奴隷制協会」の副会長の一人となった人物である。マッキントッシュは一八一三年にロンドンでスタール夫人と会う前に既に夫人の『コリーヌ』を読んで気に入り、夫人を称賛していた。一方、スタール夫人は彼に信頼を寄せていた。

黒人奴隷貿易や黒人奴隷制を批判する周囲の人々としてスタール夫人の子供たちについても触れないわけにはいかない。長男オーギュストと、長女アルベルチーナの夫ブロイ公爵はとりわけスタール夫人の死後、廃止運動に邁進する。オーギュストは一八二一年十二月に「キリスト教道徳協会」が正式に設立されると入会し、協会のなかの「黒人貿易廃止のための委員会」の委員長に就任した。そして実際にナント港に赴き奴隷船を調査したり、一般人を前に奴隷貿易について講演したり、購入した奴隷用の道具を展示するなど積極的に活動した。ブロイ公爵も「キリスト教道徳協会」のメンバーとなり、一八二七年にはオーギュストのあとを継いで「黒人貿易廃止のための委員会」の委員長となった。彼はまた、一八二三年三月二八日に政治家として貴族院で奴隷貿易を非難する演説もした。ブロイ公爵はフランスの政府と議会そして一般の人々に黒人奴隷貿易について関

心をもってもらうために、黒人奴隷貿易に関するイギリス政府の膨大な資料を丹念に読むなどして、黒人奴隷貿易について深く研究したのだった。オーギュストとブロイ公爵は一八二二年五月に一緒にイギリスに赴いた際に、「アフリカ協会」の書記を務めた経験をもちつつ、「反奴隷制協会」の設立に加わったザカリー・マコーリー（一七六八～一八三八）らの廃止論者も同席のもとでウィルバーフォースと食事を共にしている。オーギュストとブロイ公爵はこのイギリス旅行の間、イギリスの廃止論者たちとコンタクトを取り続けた。

（2）スタール夫人の考え

このように生涯を通じてスタール夫人の身近なところには黒人奴隷貿易や黒人奴隷制を批判する人が数多くいた。たしかにスタール夫人の愛人ナルボンヌ伯爵の妻はアンティル諸島のフランス領植民地サンッドマンングにプランテーションを所有しており、スタール夫人は一七九二年九月に黒人奴隷制を容認していたと思われる一節を書き残している。彼女がナルボンヌ伯爵に宛てた一七九二年九月二六日の書簡には、「ですから必要なのは、一方であなたの債権者たちがラ・ボーヴ城の売却に反対すること、他方で、アメリカにあるあなたの財産を立て直すことです」¹³と明記されている。しかしながら、スタール夫人は黒人奴隷貿易並びに黒人奴隷制に関して明確に反対の立場に立っていた人である。彼女は一七八六年一月に結婚すると、その年の三月には夫スタール男爵の母国であるスウェーデンの国王グスターヴ三世（一七四六～一七九二）に書簡のかたちで当時のフランスの様子や出来事を報告しはじめた。グスターヴ三世はフランス式教育を受けて育ち、フランスの哲学者とも文通し、パリにも滞在したことのある国王である。

マルモンテルの小説『インカ人』は彼に捧げられている。グスターヴ三世は拷問を廃止するという人道的改革を行った実績があった。スタール夫人がグスターヴ三世に宛てた一七八六年十一月十一日付の報告書には以下のように明記されている。

奴隷制の廃止は一つの世紀にとって何という栄光でしょう！ もしただ一人の人間がその元であれば、その人は人類が今までなした以上の善を行ったでしょう。しかし、「ニグロは暇な時は怠惰である」とは言うもおぞましいですが、これがヨーロッパ人たちの大いなる口実なのです。それでも、ブフレール騎士団員がああ黒人貿易について私に語ってくれた詳細は悲痛なものです。例えば、ヨーロッパ人は年をとった女や男を捕まえることができます。喜びます。ニグロたちは親への憐れみに満ちていて、父親か母親が奴隷であることを知るとすぐに身代わりになります。そしてヨーロッパの野蛮な商人たちはしばしば一人のか弱い老人の代わりに、力ある頑丈な青年二人を獲得します。その同じニグロたちの美徳を利用するのです。商人たちは、当然のことながら、そのニグロたちは自分たちとは異なる性質であると信じています。¹⁴

スタール夫人は晩年には黒人奴隷貿易を廃止するよう立て続けに公に訴えている。先に述べたように、彼女はウィルバーフォースの著作のためにわざわざ「序文」を執筆した。この「序文」はスタール夫人研究者、ジャン・ド・パンジュ伯爵夫人によれば一八一三年にロンドンで執筆されたという。¹⁵スタール夫人はその「序文」のなかで著者ウィルバーフォースを紹介するとともに、イギリスで一八〇七年に奴隷貿易禁止法案が通過するまでの道のりを述べるのであるが、黒人たちを「かわいそうな黒人たち」と¹⁶

呼び、黒人奴隷貿易を「暴虐な行為」(un acte tyrannique)、「非難すべき貿易」(Indigne commerce)として告発し、次のように述べている。

イギリスの大臣たちが黒人貿易廃止を和平の一条件としたことに憤慨したフランス人もいる。イギリスの大臣たちはこの点については、国民の願いの代弁者でしかなかった。だが、国民が互いに人間らしい行為を要求し合うような時代は歴史上の麗しい時代であろう。「……」

「……」だから、ウェリントン卿が「……」理性によってニグロの利益で勝利するのを期待しよう。

さらに、スタール夫人は「黒人貿易廃止を取り付けるための、パリに集う君主たちへの訴え」(二八一四年)を発表している。ジョン・クレイボー・イザベルによると、この書き物はロンドンで執筆され出版されたというが、¹⁷スタール夫人はそのなかでイギリスでは戦争中でありながら人々が党派の垣根を取り払って一致団結して一八〇七年に黒人奴隷貿易を廃止したことを高く評価した上で、黒人奴隷貿易が廃止されてもイギリスの植民地は打撃を受けなかったと述べている。そして、黒人奴隷貿易の実態に触れ、イギリスに倣って黒人奴隷貿易を廃止するようフランスのみならずスペイン、ポルトガル、オーストリア、プロシア、ロシアの君主に訴えている。スタール夫人はこの訴えのなかでウィルバーフォースの名前を挙げ、彼の功績を称えるのを忘れてはいない。女性の社会的地位が低かった時代にあつてスタール夫人は政治問題に敢えて深入りし、各国の君主に直訴するという大胆な行動を起こしたのであった。

スタール夫人は死去するおよそ一年半前にも黒人奴隷制に反対していた。彼女は一八一六年一月六日付の、第三代アメリカ合衆国大統領トマス・ジ

エファソンに宛てた書簡で、「もしあなたが南部で奴隷制をなくすことができれば、人間の理性が着想しうるような完璧な政府が世界で少なくとも一つ存在するでしょう」¹⁸と書いている。

グスターヴ三世宛ての書簡並びにウィルバーフォースの著作に対する序文を見ると、「悲痛なものです」、「かわいそうな黒人たち」というように、夫人が黒人奴隷貿易に心を痛めていたこと、さらには世紀にとつての「栄光」、「麗しい時代」というように、黒人奴隷貿易廃止や黒人奴隷制廃止を歴史上の画期的な出来事として認識していたことが分かる。

アフリカにプランテーションを設けるといふアイデア

既に述べたように、「ミルザ」においてはセネガルにプランテーションが設置されている。では、アフリカにプランテーションを設けるといふアイデアをスタール夫人はどのように獲得したのだろうか。これまでの研究によって、このアイデアはスタール夫人の独創ではなく、スタール夫人にそのアイデアを与えたのはブフレール騎士団員（一七三八〜一八一五）であると考えられる。先に触れた、一七八六年十一月十一日付のスウェーデン国王グスターヴ三世に宛てたスタール夫人の報告書には次のようにしたためられている。

ブフレール騎士団員はセネガルに再び出発しようとしています。しかし、これは熱意のよい手本です。といたしますのも、パリを離れてセネガルに行くには勇気が必要ですから。ブフレール騎士団員はセネガルでサトウキビを植えさせて、アフリカの海岸のニグロたちを次々に自国でこの食品を自由に栽培する気にさせるよう企てているようです。「……」それでも、ブフレール

騎士団員がああ黒人貿易について私に語ってくれた詳細は悲痛なものです。¹⁹

ジャン・ド・パンジュ伯爵夫人は一九三四年に発表した研究論文において右の報告書の一節とほぼ同じ箇所を引用した直後に、「それゆえ、ブフレール騎士団員のこの話が直接、「ミルザ」と呼ばれる中編小説を着想させる」²⁰と明言している。クリストファー・L・ミラーも二〇〇八年に出版した研究書においてやはり上記のグスターヴ三世への書簡のくだりに着目して、「ジェルメーヌ・ド・スタールのアフリカに関するアイデアがブフレールとの交友関係から直接来たことにほとんど疑いの余地はありえない」²¹と断言している。スタール夫人が書いているとおり、ブフレール騎士団員は黒人たちにサトウキビやタバコ、コーヒーの栽培の仕方を教え、アフリカでそれらを栽培させることを実際に考えていた。スタール夫人はブフレール騎士団員の計画を知り、それを作品内で具体化したと考えて間違いないだろう。

では、スタール夫人にアフリカについてのアイデアをもたらしたブフレール騎士団員とは一体どのような人物なのであるうか。ブフレール騎士団員ことスタニスラス・ジャン・ド・ブフレールは今日、詩人としてフランス史にその名を残しているが、一七三八年五月三十一日にナンシーの近くで生まれた。ブフレール騎士団員の母親マリー・フランソワーズ・カトリール・ヌ・ド・ボーヴォー・クラオン、つまりブフレール侯爵夫人は当時ロレーヌ地方を治めていたポランド王スタニスワフのリュネヴィルの宮廷で王妃付きの女官を務め、王の愛人にもなった。彼女は同じくスタニスワフに仕えていたサン＝ランベールの愛人でもあり、ヴォルテールとも知り合いであった。

ブフレールは当初、聖職者になる予定であり、一七六〇年にパリのサン＝シュルピス神学校に入学した。ここで彼は文筆に取りかかり、『ゴルコンド王妃』と題された短編小説を一七六一年に刊行し、この作品は成功を収めた。しかし、彼は神学校を飛び出し、マルタ騎士団の団員となり、戦に参加した。戦場では勇敢に戦い活躍し、階級が上がって少将になったが、一七八四年に軍隊を去った。その後間もなく彼は人生の転機を迎えた。翌一七八五年に、植民地の改革を目指した海軍大臣カストル元帥からセネガル並びにゴレ島の総督に任ぜられたのだった。これは左遷であると受け取られたが、ブフレール騎士団員は借金を返済するためにこの任務を引き受けたと考えられている。彼はフランスが行っていた黒人奴隷貿易のまさに最盛期にセネガルに二度、長期滞在することになった。まずはじめ一七八五年十二月にフランスを発ち、一七八六年一月十四日にサン＝ルイ島に到着した。²³そしてセネガルに半年ほど滞在したあと、一七八六年八月にフランスに帰国した。²⁴次に彼はベアトリス・W・ジャザンスキによると、同年十二月二三日頃にロリアンを出港し、翌一七八七年一月十五日にゴレ島に到着した。²⁵今回は一年弱セネガルに滞在したあと、ロジャー・リトルによると一七八七年十二月にフランスに帰国した。²⁶スタール夫人がスウェーデン国王グスタヴ三世にブフレール騎士団員のサトウキビプランテーション計画を報告したのは一七八六年十一月十一日、つまりブフレール騎士団員が第一回目の赴任を終えて帰国していた間の出来事だったわけである。スタール夫人はセネガルで黒人奴隷貿易の実態をその目で見たと人物から直接話を聞いたことになる。ブフレール騎士団員はセネガルから帰国後は一七八八年にアカデミー・フランセーズの会員となり、一七八九年から一七九一年まで国民議会議員を務めたが、かねてからの恋人サブラン夫人が一

七九一年に亡命したのを受けて夫人に再会するため自らもプロシアに亡命した。そして一七九七年にサブラン夫人と結婚し、一八〇〇年にフランスに帰国してからはナポレオンに仕えた。第一帝政期には文学創作にも励み、王政が復古するやマザリーヌ図書館の管理人補佐に任命されるも、一八一五年一月十九日にパリで亡くなった。²⁷

ブフレール騎士団員はセネガル総督でありながら、個人的には黒人奴隷貿易と黒人奴隷制に反対していた。『フランス伝記辞典』(ルトゥゼ・エ・アネ、一九五四年)には次のように明記されている。「彼『ブフレール』は総督職にあつて大いなる温情を示した。自身は慣習に反して黒人貿易からいかなる利益も得ず、周囲の者に黒人貿易の許可を与えなかった。²⁸彼は身内のボワジュラン夫人に宛てた書簡において「捕虜、収容所、奴隷、鎖、鉄鎖などのことにはいつも胸が痛みます」と書き記している。彼が黒人たちにアフリカでサトウキビを栽培させようとしたのも、そのようにしてアフリカ人にきちんと報酬を与えればアフリカ人は労働を好むようになるし、ヨーロッパ人は人間の尊厳を傷付けずに商業活動を行うことができると考えたからであった。ブフレール騎士団員が黒人奴隷貿易と黒人奴隷制に反対していた確たる証拠、それは彼が「黒人の友協会」の会員だったことである。「一七八九年」と明記された「黒人の友協会会員名簿」には五九番のところに「ブフレール騎士団員、ロアン館、ヴァレンヌ通り」³⁰と刻まれている。さらに一七九〇年のものと考えられる「黒人の友協会」の会員名簿には四八番の箇所に同じく「ブフレール騎士団員、ロアン館、ヴァレンヌ通り」³¹と確かに記されている。「ミルザ」は黒人奴隷貿易及び黒人奴隷制に反対する作者が同じ意見をもつ人の話を聞いて着想し創作されたわけである。

では、アフリカにプランテーションを設けるといふ発想はブフレール騎士団員のオリジナルであるかというところではない。ブフレール騎士団員がセネガルに赴任するおよそ十四年前にこのアイデアを明確に打ち出した人物がいた。それは重農主義者の一人、デュボン・ド・ヌムール（一七三九〜一八一七）である。³² アベ・ニコラ・ボードーは一七六五年に雑誌『市民日誌』を創刊しており、この雑誌は一七六七年に重農主義者たちの公的機関誌となった。この雑誌の一七七一年の第六巻第二部には、当時主幹となっていたデュボン・ド・ヌムールが執筆した、サン＝ランベールの短編小説「ズイメオ」の書評が掲載された。ここでは「ズイメオ」についてのコメントが述べられるとともに、「ズイメオ」のテクストの大部分が引用された。だが、デュボン・ド・ヌムールは「ズイメオ」を紹介しただけでこの記事を閉じはしなかった。彼はそのあとに重農主義者として経済に関する自説を展開した。これはもったもなことである。なぜならば、『市民日誌』は文学雑誌ではなく、政治・経済誌だからである。デュボン・ド・ヌムールは「サン＝ランベール氏は卓越した詩人である。我々は冷酷ではないが厳正な計算者（calculateurs）なのだ」³³ という具合に自らの立場を明確にした上で、黒人奴隷制を人類がもつ権利の重大な侵害であるとして糾弾しつつ、この制度を経済の観点から分析する。人々は自由な人間に給料を支払って働かせるよりも、黒人奴隷に働かせたほうが安上りだと考えているが、デュボン・ド・ヌムールはそれは誤りであることを、黒人奴隷制を維持するのに必要な経費を具体的に示しながら証明していく。そして黒人奴隷制を廃止する方法として、黒人にアフリカでサトウキビを栽培させるという案を提示する。

だが、彼ら「ヨーロッパの人民」の誰も、神がサトウキビとニグロをアフリカの海岸に据えたからには、砂糖を得るのに罰も出費も残酷さもそれほど必要ないということ、海岸に平和な施設をいくつかつくり、そこに職人、圧搾機・釜製造者を派遣して、ニグロに次のように言うだけで十分だということをしつくり考えようなどと思わなかった。「友よ、これらのサトウキビが、確かに見えますね。それを切りなさい。我々が与える二つのローラーの間に、それを通しなさい。その汁をここに、ある釜で沸かしなさい。そうすれば、我々は汗から生じるシロップの代金をあなたたちにきちんと支払います」³⁴

デュボン・ド・ヌムールはもし黒人がアフリカでサトウキビを栽培していたならば、当時コーチシナで自由な労働者が栽培した場合と同じようにおそらく一リーヴルあたり六リアルで精糖が手に入るだろうと推測している。そして今後アフリカでの栽培を最初に導入するヨーロッパの君主は「ヨーロッパとアフリカの恩人、黒人と白人の改良者」となり、神の意にも人間の意にも沿うだろうと予想している。アフリカでサトウキビが栽培されるようになったら、アメリカでは他の植物を栽培すればよい。このような考えを抱くデュボン・ド・ヌムールは当然のことながら、黒人奴隷貿易と黒人奴隷制に反対していた。それは彼が後に「黒人の友協会」の会員になることによって裏付けられる。³⁵

ブフレール騎士団員がデュボン・ド・ヌムールと交流があったのかどうかについては定かではない。しかし、ブフレール騎士団員の母親はサン＝ランベールの愛人であったからには、ブフレール騎士団員が『市民日誌』に掲載されたデュボン・ド・ヌムールの記事を読んだ可能性、誰かからの記事の話の聞いた可能性は十分にある。「ミルザ」は黒人奴隷貿易と黒

人奴隷制に反対する経済学者、セネガル総督並びに作家のつながりの上に創作された可能性がある。

信頼の場

以上を踏まえた上で、次に「ミルザ」の作品世界に踏み込んで考察する。読者は「ミルザ」を読むと、この作品には不明な点がいくつか敢えて作り出されているのに気付く。作品冒頭にあらわれる、旅行者であり「ミルザ」全体の語り手である「私」がセネガル旅行について報告する相手の「奥様」(Madame)とは一体誰なのか。「私」がフランス語で報告しているからには、この「奥様」はフランス語を解する女性であると考えられるが、具体的には誰なのかは分からない。また、ミルザが自害したのはなぜか。この点についてもはっきりとは語られていない。キシメオにもう愛されなくなったから、あるいは敵の部族の男性を愛してしまったから、あるいはこれから奴隷としての人生を歩みたくないからなど、読者によって見解が分かれるところである。そもそも、旅行者「私」の人物像についてもはっきりしない。「私」はおそらくフランスからセネガルに渡って来た、セネガル総督と関わりのある男性であると考えられる。また、フランス語で手紙を書いているからには、ある程度教養を身につけた人物であると考えられる。十八世紀には商人、行政担当者、兵士、宣教師らがアフリカに赴き、アフリカを訪れたフランス人の数も増えていった³⁶。だが、「私」の名前はおろか年齢、風貌、職業、身分についても判然としない。「私」は何者なのか。しかし、アフリカのプランテーションに着目すると、「私」という人物の片鱗が浮かび上がってくる。

「私」がプランテーションに着いた晩、「私」が総督によって派遣された

ことと、「私」の旅の目的を知った、プランテーションの黒人リーダー、キシメオは「私」に「明日、一緒に私のプランテーションを歩き回りましょう³⁷」と言う。これはことばどおり翌日、実行に移される。「彼」「キシメオ」は私にプランテーションのすみずみまで極めて丁寧に見せてくれた。この点に着目すると、「私」はプランテーションの視察者であると考えられる。しかし、単に興味本位でプランテーションを見学しに来た者ではないだろう。ブフレール騎士団員が黒人奴隷貿易と黒人奴隷制に反対していたこと、そしてスタール夫人がセネガルにプランテーションを設けるといふ、ブフレール騎士団員のアイデアを作品に取り入れたことを知ったあとでは、「私」は黒人奴隷貿易と黒人奴隷制を廃止するためにアフリカにより多くのプランテーションを設置するべく見学にやって来た人間として立ちあらわれてくる。「私」はブフレール騎士団員そしてデュボン・ド・ヌムールが立てた計画を実現するために奔走する人物なのである。当時アフリカを訪れたフランス人たちにとっては、アフリカは飽くまで黒人奴隷の供給地であって、農業のために活用する地ではなかった。この点からすると、「私」は極めて例外的なフランス人であることが分かる。

では、「ミルザ」においてキシメオがリーダーを務めるプランテーションはどのような場なのだろうか。まずは、このプランテーションはゴレ島から数里のところにあることを押さえておく。ゴレ島はダカールがあるベルデ岬の沖、約三キロメートルのところに位置する最長およそ九〇〇メートル、幅およそ三〇〇メートルの小島である。一九七八年にはじめてユネスコ世界遺産に登録された。既に一四四四年にはポルトガル人がこの島に辿り着いた。その後、この島はオランダ、イギリス、フランスの間で争われ、フランスは一六七七年にこの島をオランダから奪い、黒人奴隷の集荷

基地にした。十八世紀にはゴレ島に兵士や商人、使用人など、千人以上が居住していたという。

キシメオのプランテーションは成功例として提示されている。そこでは黒人は働きづめではない。プランテーションに到着した旅行者の「私」が目にしたのは黒人たちの遊ぶ姿である。彼は次のように語っている。「私が近付くと、ニグロたちは休憩時間を享受していました。弓を射て楽しんでいました。」³⁸さらに、旅行者の「私」はプランテーションを見学し、以下のように報告している。「幸せなニグロたちは少しも労働に打ちひしがれていませんでした。」³⁹しかも、キシメオのプランテーションでは黒人は暴力を振るわれていないし、身体の一部を切断されるなどの残酷な目にも遭っていない。プランテーションを見学した感想として旅行者の「私」は次のように語っている。「私は残酷さが不要であ「……」ることが分かって喜びました。」キシメオのプランテーションは、黒人が朝から晩まで働かされ、しばしば鞭で打たれ、手や足や耳を切断されるサンッドマンングのプランテーションとは大違いである。しかし、キシメオのプランテーションはサンッドマンングのプランテーションに劣らない収益をあげていた。「彼「||キシメオ」のプランテーションはサンッドマンングで同数の人間によって耕される同じ広さの土地と少なくとも同じくらい利益をあげていました。」なおその上に、キシメオのプランテーションは整然としていた。旅行者は次のように語っている。「私はそこで目を引く秩序(ordre)に驚きました。」⁴⁰ここでいう「秩序」とは道具の配置や黒人たちが働く様子についてであろうと考えられるが、キシメオのプランテーションでは社会的秩序も整っている。というのも、そこではキシメオは結婚相手であるウーリカがいながらミルザに恋しミルザに会っていた時のようにもはや愛人が

いることもなく、夫そして父親の立場に収まっているからである。

黒人が過剰労働や暴力によって痛めつけられることもなく、経済的観点からもうまく機能し、秩序立ったキシメオのプランテーションは黒人と白人が互いに信頼し合う場となっている。作中のセネガル総督は実はフレール騎士団員その人であると主張する研究者がいる一方で、⁴⁰旅行者の「私」こそがフレール騎士団員であると考えられる研究者もいるが、⁴¹いずれにせよ、キシメオのプランテーションはセネガル総督が建設を計画し、キシメオに運営を任せているものである。黒人と白人間の相互の信頼及び協力の上に成立しているものである。プランテーションに建つキシメオの住居もまた黒人と白人の信頼と協力の賜である。旅行者の「私」は次のように語っている。「そして私はフランス人たちが建てるのを手伝ったという家、⁴²といってもまだ原始的な何かを留めている家の近くに着きました。」フランス人が黒人の家作に協力したのはフランス人と黒人相互の信頼があつたのことと言えよう。

キシメオのプランテーションではキシメオ夫妻と旅行者「私」の間にも信頼関係が打ち立てられる。とりわけキシメオの妻ウーリカは早くも「私」に対面する前から「私」に信頼を寄せる。彼女は「私」に付き添ってプランテーションに来たガイドに「私」を歓迎する意向を伝える。

「総督があなたの方を遣わしたのですね」とウーリカは声を大に言いました。「ああ！入ってもらってください。よくいらっしやいました。私たちが所有しているものは全てその方のもです。」ウーリカは急いで私のところに来ました。

この歓迎の意はウーリカの「私」に対する信頼が前提になっていると言

えよう。ウーリカによる歓迎の言動はまだ続く。小屋に入ると、「私」には「国のありとあらゆる果物でできた食事」が提供されるからである。帰宅したキシメオも「私」を歓迎する。キシメオは「私」に「一番よいベッド」を割り当て、「すやすやと眠ってください。あなたにはここで快適に過ごしていただきたいのです」と言う。キシメオのこの計らいも「私」に対する信頼があつたことである。翌日、キシメオは自らの悲恋、つまりミルザとの恋を「私」に語るのであるが、この打ち明け話の根底にあるのが、「私」のキシメオに対する信頼、キシメオの「私」に対する信頼、すなわち黒人と白人相互の信頼である。前日に知り合ったばかりであるといえ、キシメオは「私」を信頼しているからこそ二年來誰にも話していない自分の苦しみ、「不幸の長い話」を語るのであるし、一方、「私」はキシメオを信頼しているからこそその話に耳を傾け、話が終わったあとに涙を流す。そればかりかミルザという名前を忘れないでほしいというキシメオの願いを受け止めかねえようとする。「そして私は約束を果たすために彼の話語り、もしできるならば、ミルザという悲しい名前を忘れられないものにします⁴³」という具合に作品は終わっている。何より、キシメオは自分の過去を語り出す直前に「私」に次のように言っている。「あなたは私に信頼されて得意になってはいけません。しかし、あなたは善良な方なので、私は勇気がわき、あなたの同情を当てにします⁴⁴。」キシメオがミルザとの恋愛を「私」に語るのはプランテーションにおいてである。この意味においても、キシメオのプランテーションは白人と黒人が互いに信頼し合う場となっていると言える。

黒人が白人を信頼し、白人が黒人を信頼する場としてのプランテーション。キシメオのプランテーションが特異な場であることは、その外部にお

いて黒人と白人が対立しているさまが描かれることによって際立つ。キシメオのプランテーションでは黒人は白人に痛めつけられることはなかったが、その一方で、時を同じくしてセネガルでは相変わらず黒人奴隷貿易が行われていた。キシメオは捕らえられ奴隷となり、白人の手に渡る。プランテーションの外では黒人は白人の奴隷となり、黒人にとって白人は自らの有無を言わず連れ去り耕作を強いる敵対者である。キシメオはヨーロッパの奴隷商人たちを「この残忍なヨーロッパ人たち」(Ces farouches Européens)⁴⁵、「この卑劣なヨーロッパ人たち」(Ces vilis Européens)、「この貪欲な商人たち」(Ces avides marchands)と呼んでいる。

黒人と白人が信頼し合う場としてのキシメオのプランテーションが特別である点はまた、黒人同士の対立が描かれることによっても引き立つ。「ミルザ」の世界ではカヨール人とジャロフ人が敵対している。キシメオはカヨール人であるのに対して、ミルザはジャロフ人である。史実によると、十三世紀から十四世紀に現在のセネガルの中央部から沿岸部にかけてジョロフ王国が形成された。大西洋沿岸部にはカヨール王国が形成されており、十六世紀半ばにカヨール王国がジョロフ王国を打ち破ったという。「ミルザ」においてはカヨール人とジャロフ人が激しく対立していることが語られている。キシメオは旅行者の「私」に以下のように話している。

「……」 私たちは隣国のジャロフ人としては戦争状態にありました。そして私たちは捕虜をヨーロッパ人に売るといふ恐ろしい習慣を互いにもつたので、和平によってさえ消えない激しい憎悪のせいで私たちの間にはいかなるコミュニケーションもありませんでした。⁴⁶「……」

「……」私の父はジャロフ人の国の女性を決して自分の娘に選ばなかったでしょう。⁴⁷「……」

ある日、ジャロフ人はカヨール人の村を襲い、何人ものカヨール人を捕まえてヨーロッパ人に売り渡す。「ミルザ」においては黒人同士が敵対していることが前面に押し出されている。

終わりに

これまでキシメオのプランテーションが成功している点、黒人と白人が信頼し合う場である点を見てきたが、では、このプランテーションは黒人たちにとって何の問題もない理想の場所なのだろうか。答えは否である。旅行者の「私」は既にプランテーションに着いたその日にそこに漂う悲しみに気付いている。「私は悲しみでいっぱいでした。目にしたものの全てが悲しみの跡を留めていました。」⁴⁸何よりもプランテーションのリーダー、キシメオはミルザのことが原因で苦しい思いを抱えている。それは知り合ったばかりの「私」にもはっきりと分かるものである。「明け方に私は起きました。キシメオが前日よりもなお一層気落ちしていると感じました。」キシメオとミルザの恋愛を知るウーリカもまたプランテーションで涙に暮れつつ悲しい日々を送っている。黒人たちはたしかに働きづめではなく、暴力も振るわれないが、彼らにしても真に心から幸せであるとは言えない。旅行者の「私」もプランテーションの黒人たちを目にして次のように語っている。「ニグロたちは「……」弓を射て楽しんでいました。この楽しみが彼らの唯一の活動であった時をたぶん惜しんでいたのでしょう。」

十八世紀後半のフランスでは黒人は怠惰で、人間らしい感情を知らない

野蛮人であるなどと考えられていた。このような時代において黒人奴隷貿易と黒人奴隷制に反対していただけでなく、一女性でありながら黒人奴隷貿易を廃止するようヨーロッパ諸国の君主に堂々と訴えもしたスタール夫人は黒人は残酷に扱わなくても十分に働く上に、白人に信頼されるに値する人間であることと同時に、黒人は環境が整った場にあってもなお悲しみといった感情をもちうる人間らしい人間であることを示したかったのではないだろうか。

注

本稿は二〇一九年七月十三日に東京・新宿文化センターにおいて開催された第十三回日仏女性研究学会会員研究発表会で筆者が「スタール夫人「ミルザ」におけるアフリカのプランテーション」のタイトルで発表した内容に修正及び加筆を施したものである。

1 David Glass Larg, *Madame de Staël: la vie dans l'œuvre (1766-1800)*, Édouard Champion, 1924, p. 45. 引用文の邦訳は筆者による。以下同様。

2 Jacques Necker, *De l'administration des finances de la France*, dans *Œuvres complètes*, t. IV, Scientia Verlag Aalen, 1970, p. 374. 本書「つまり一八二一年版(パリ)の重版の三七〇頁では「フランスの植民地の税と人口」の章が「第三章」となっているが、これは第十三章の誤りである。

3 Jacques Necker, *Sur l'administration de M. Necker*, dans *Œuvres complètes*, t. VI, Scientia Verlag Aalen, 1970, p. 589.

4 John Clairborne Isbell, «Voices Lost? Staël and Slavery, 1786-1830», dans *Slavery in the Caribbean Francophone World: distant voices, forgotten acts, forged identities*, ed. Doris Y. Kadish, The University of Georgia Press, 2000, p. 40.

5 一七八九年の「黒人の友協会会員名簿」には七八番にシュヴァリエ・アレクサンデル・ド・ラレットと明記されている。(La Révolution française et l'abolition de l'esclavage, t. VI, EDHIS, 1968, p. (7)) 一七九〇年のものであると考へる。

れる「黒人の友協会会員名簿」にも六三番にシュヴァリエ・アレクサンドル・ド・ラメットと刻まれている。(Eloise Ellery, *Brissot de Warville*, Burt Franklin, 1970, p. 445.)

9 コンスタンはイギリスで一八〇七年に設立された「アフリカ協会」が毎年出版していた『アフリカ協会役員報告』の第十三号(一八一九年)と第十六号(一八二二年)など、反黒人奴隷制を訴える書物を所有していたことが明らかになつてゐる。(Benjamin Constant, *Commentaire sur l'ouvrage de Filangieri*, dans *Œuvres complètes*, t. XXVI, De Gruyter, 2012, p. 194, note 3.)

7 Alexander von Humboldt, *Relation historique du Voyage aux Régions équinoxiales du Nouveau Continent*, t. III, F. A. Brockhaus, 1970, p. 447.

8 Marie-Bénédicte Diethelm, Introduction, dans Alexandre de Humboldt, *Lettres à Claire de Duras (1814-1828)*, éd. Marie-Bénédicte Diethelm et Marc Fumaroli, Editions Manucius, 2016, p. 34.

9 フンボルトは中南米探検を終え一八〇四年八月三日にホルドーに到着する。同日二十七日にはパリへ出、ドイツとフランスの祖國がありながらも、またナポレオンに不審に思われながらも、それ以降一八二七年までの大半をパリで過ごした。研究機関のみならず書籍もそろい、著名な専門家も集まつており、パリは当時、科学の中心であった。フランス革命によってキリスト教の権威は失墜し、科学者たちはキリスト教の教義に縛られずにものを言うことができた。その上、パリは出版技術の中心地でもあり、膨大な科学的著作を出版することができ、植字工や版画家がいた。また、フランス語は科学的調査を正確に生き生きと明快に描くことを可能にし、専門家だけでなく一般人からも探検家フンボルトが高く評価されることを約束していた。フンボルトが実験を重ね、学者たちと議論し、探検の成果を執筆して自らの新説を世に送り出すにはパリは打って付けの場所だった。

10 ピットは当初、奴隷貿易廃止を支持していたが、フランスの植民地サン・ドマングで一七九一年に黒人奴隷が反乱を起こしたのを受けて奴隷貿易廃止反対に転じた。

11 「反奴隷制協会」については以下参照。近藤尚武「「反奴隷制協会」の研究——十九世紀前半イギリスにおける反奴隷制運動の一断面——」『三田商学研究』第

三〇巻四号、一九八七年十月、七六―九五頁。

12 Victor de Pange et Norman King, « La bibliothèque anglaise de M^{me} de Staël », *Cahiers staëliens*, n° 14, septembre 1972, p. 51-52.

13 Madame de Staël, *Lettres à Narbonne*, éd. la comtesse Jean de Pange et Georges Solovieff, Gallimard, 1960, p. 100.

14 Madame de Staël, *Correspondance générale*, t. I, éd. Béatrice W. Jasinski, Champion-Slatkine, 2009, p. 141.

15 Comtesse Jean de Pange, « Madame de Staël et les nègres », *La Revue de France*, 1^{er} octobre 1934, p. 439.

16 Madame de Staël, « Préface pour la traduction d'un ouvrage de M. Wilberforce, sur la traite des nègres », dans *Œuvres complètes de Madame la baronne de Staël-Holstein*, t. II, Slatkine Reprints, 1967, p. 290.

17 John Claiborne Isbell, art. cit., p. 45.

18 « Notes et documents », *Revue de littérature comparée*, vol. 2, 1922, p. 636.

19 Madame de Staël, *Correspondance générale*, t. I, p. 141.

20 Comtesse Jean de Pange, art. cit., p. 429.

21 Christopher L. Miller, *The French Atlantic Triangle: Literature and Culture of the Slave Trade*, Duke University Press, 2008, p. 144.

22 Roger Little, « Madame de Duras et *Ourika* », dans Madame de Duras, *Ourika*, University of Exeter Press, 2005, p. 52.

23 Sue Carrell, « Introduction au premier séjour du chevalier de Boufflers en Afrique », dans la comtesse de Sabran et le chevalier de Boufflers, *La Promesse : correspondance 1786-1787*, Tallandier, 2010, p. 19.

24 Roger Little, « Madame de Duras et *Ourika* », p. 52.

25 Madame de Staël, *Correspondance générale*, t. I, p. 141, note 2.

26 Roger Little, « Madame de Duras et *Ourika* », p. 52. マー・カレルはフンボルト騎士団員がフランスに帰国したのは一七八八年であると述べている。

Sue Carrell, « Introduction au second séjour du chevalier de Boufflers en Afrique », dans la comtesse de Sabran et le chevalier de Boufflers, *op. cit.*, p. 241.

27 ブフレル騎士団員の死亡日については説が分かれている。ここでは以下に従
つた。 *Dictionnaire de biographie française*, t. VI, Letouzey et Ané, 1954,
colonne 1286.

47 *Ibid.*, p. 166.
48 *Ibid.*, p. 161.

(たど かな 総合教育センター)

28 *Ibid.*, colonnes 1284-1285.

29 Cité par Sue Carrell, dans la comtesse de Sabran et le chevalier de Bouffers,
op. cit., p. 17.

30 *La Révolution française et l'abolition de l'esclavage*, t. VI, *op. cit.*, p. (5).

31 Eloise Ellery, *op. cit.*, p. 444.

32 シッシェル・デュシユは人々がアフリカの地域を活用することを考えるようにな
ったのは一七六三年よりも後にすぎないと断言し、黒人奴隷貿易を終息させ
てアフリカで黒人に作物を栽培させるといふ計画を先駆的に思い付いた人とし
てセネガルで調査を行った植物学者、シッシェル・アダムソン（一七二七〜一
八〇六）を挙げつつ、 Michèle Duchet, *Anthropologie et histoire au siècle
des lumières*, Albin Michel, 1995, p. 47.

33 *Fictions coloniales du XVIII^e siècle*, éd. Youmna Charara, L'Harmattan,
2005, p. 299.

34 *Ibid.*, p. 305. (傍点箇所は原文イタリック。)

35 *Ibid.*, p. 297.

36 Léon-François Hoffmann, *Le Nègre romantique*, Payot, 1973, p. 51.

37 Madame de Staël, *Mirza*, dans *Œuvres de jeunesse*, éd. Simone Balayé et
John Isbell, Desjonquères, 1997, p. 161.

38 *Ibid.*, p. 160.

39 *Ibid.*, p. 162.

40 Christopher L. Miller, *op. cit.*, p. 147.

41 Comtesse Jean de Pange, art. cit., p. 429.

42 Madame de Staël, *Mirza*, p. 159-160.

43 *Ibid.*, p. 173.

44 *Ibid.*, p. 162-163. (傍線は引用者による。以下同様。)

45 *Ibid.*, p. 170.

46 *Ibid.*, p. 163.